

[学会]

第702回 千葉医学会例会

第1内科教室同門会例会

日 時：昭和59年1月28日（土）

場 所：京成ホテル

1. 成人T細胞白血病の経過中に自己免疫性溶血性貧血を併発した1例

木下由彦, 宮城三津夫, 山中 理, 佐藤勝則,
朝比奈信武, 小林康弘 (県立東金)
米満 博 (千大)

60歳女性。九十九里出身。昭和55年より、リンパ球増多を示し、58年9月より皮疹出現。抗 ATLA 抗体1280倍陽性で、成人T細胞白血病と診断。経過中、自己免疫性溶血性貧血を合併し、副腎皮質ホルモンにて軽快した症例を報告した。

2. 細網症の2症例

桜井 渉, 柚木宏和, 早坂 章, 陳 信義,
鈴木紀彰, 隅越利雄, 森 博道, 福山悦男,
神田芳郎, 川口新一郎, 和田豊次, 三輪清三
(君津中央)
松村康一 (東条病院)
重田英夫 (千葉県立がんセンター臨床検査部)

我々は不明熱を主訴として入院し、その骨髓所見より、血球の食食像を有す大型の細胞を認め、その染色性等より細網症と診断した2症例を経験した、第Ⅰ例はリウマチ性疾患ないし、ウイルス感染が引き金となった反応性細網症でありステロイドにて軽快、第Ⅱ例は各種治療に抵抗し、死の転起をとった悪性細網症であった。不明熱疾患の診断に際し、骨髓所見が有力な手がかりを与えてくれ、その重要性を再認識させられた症例であった。

3. 高ガンマグロブリン血症をきたした胸腺腫瘍の1例 —Plasma cell type of Castleman's lymphoma

井関 徹, 湯口恭利, 土屋聖二, 林 良明,
佐々木健身, 永井 順 (沼津市立)
小沢弘侑, 鈴木昭一 (同・外科)

堀江 弘

(千大・一病理)

我々は、微熱、全身倦怠感、及び、貧血、高ガンマグロブリン血症を示した縦隔腫瘍を、経験し、腫瘍摘出後の病理学的検索により、Castleman's lymphoma の Plasma cell type と診断した。酵素抗体法による IgG, IgA 産生細胞の証明及び、術後経過より、術前の臨床所見は、本腫瘍に起因したと考えた。⁶⁷Ga-citrate の集積、Hassall corpuscular の存在、電顕上 Tonofilament の存在という本症例の特徴を併せて報告する。

4. 後腹膜に原発した Malignant fibrous histiocytoma (MFH) の1例

中沢 功, 鈴木良一, 浅田 学, 田中秀雄,
諸橋芳夫 (旭中央)

MFH は軟部悪性腫瘍のなかでは、最も頻度の高いものである。しかし、後腹膜に原発するものは、本邦においては、23例が報告されているにすぎず、その予後は極めて悪い。今回われわれは、後腹膜に原発した一例を経験したので、腹部超音波検査、X線 CT 検査、血管造影、手術所見、病理組織所見をしめして報告した。今後は、腹部超音波検査・CT 等にて、比較的早期に本症が診断される可能性があり、予後の向上が期待される。

5. 肺感染症に対する経皮的肺吸引法

鈴木 光 (都立府中・呼吸器科)

細菌性肺炎の起炎菌決定を目的として、経皮的肺吸引法を行なった。72例、76回行ない、45回、63%に菌を検出した。検出率は空洞ありの群68%、空洞なしの群39%であった。疾患別にみると、嫌気性菌肺炎、肺結核で検出率が高かった。合併症として、気胸8%、血痰39%、うち1回は持続ドレナージを要したが、重大な合併症はなかった。

本法は技術的に容易であり、合併症が少なく、得られた所見の信頼性が高い。試みてよい検査法である。